

---

# 刺客、ココニアル

sirokami

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

刺客、ロコニアル

### 【Zコード】

Z0095M

### 【作者名】

sirrokami

### 【あらすじ】

哀しき母をした若き侍「檜山 龍河」。

彼は幼い頃、ある男に両親を目の前で殺された。

その衝撃のせいか、彼はそれ以来、自分の感情を表に出さなくなつた。

親を失い、両親の身内に引き取られ、十年の時が過ぎた。

彼はその中であることを決意した…

両親を殺したその男に復讐することを！

その男は天蓋をかぶり、左手の甲にバツの傷がある。

そんな記憶を頼りに彼は仇討ちに出る。

旅の中、彼は多数の人物と出会い、闘い、成長する。

そんな小さな時代劇物語である。

## 序幕

時は昔にさかのぼる。

その日はとても心地よい日だった。

季節は春、桜は満開、小鳥たちの轉りや野原で遊ぶ子供たちの無邪  
気な声が聞こえてくる。

そんな小さな村に端くれに、小さな墓の前にががんで、供養してい  
る一人の長髪の若い侍がいた。

「父上、母上、行って参ります。」

侍は閉じていた目をゆっくりと開き、深く息をつき、後ろ髪を結び  
直し、立ち上がった。

それと同時に一瞬、強く風が吹き、桜の花びらが舞つた。  
侍は空を仰いだ。

十年前もこんな日であった。

その侍の名は「檜山

龍河」

一人の哀しき目をした侍の仇討ちが今、始まる。

## 第一幕

龍河は三里弱、北東に歩いた。

すると、大きな街に入った。

まだ昼間であるせいか、街は人々で賑わっていた。

早速、尋ねる事にした。

「御免。」

龍河は薪売りの商人に声を掛けた。

「なんだい、にいちやん？」

薪売りの商人は威勢良く応えてくれた。

龍河は懐から一枚の紙を出した。

そこには、龍河が描いた天蓋の男の絵があつた。

その絵を突きつけ商人に言った

「この男を見たことがあるか？」

龍河は絵の才能はあまりないがそれなりにうまく描かれていた。

男はその絵を見て

「うーん、こんな奴見たことないな…」

商人は首を傾げた。

「そうか。」

龍河は再び、その紙を懐にしまい

「失礼する。」

と言つてその場を立ち去つた。

「力になれなくて悪いねえ。」

その言葉を背にまた聞き込みを再開した。

街中の人々に尋ねたが、誰一人としてその男を見た言う者はいなかつた。

龍河は諦め、次の街に向かおうとした。

そこに走り回る二人組みの子供が目に入った。

すると、一方の子供が、木箱を運んでいる瘦せ型の男にぶつかつた。

その衝撃で男は木箱を落としてしまった。

すると男は

「何してんだクソガキッ！……」

と怒鳴りつけた。

子供はひどく驚いたようで腰を抜かしていた。

するとその子供の母親らしきものが現れ

「申し訳ありません！私の不注意で、どうかお許しを……」

母親はとその後も何回も頭をさげていた。

すると男は

「あれ？あんた、この間もそのガキに俺、迷惑かけられてるんだよ。

「えつ……？」

「え？じゃねえよ、慰謝料よこせや。」

「しかし、今はまったくお金を……」

「じゃつ、死ね。」

男はそう言つと刀を抜いて、母親に振りかぶつた。

「誰か！つ――！」

母親は子供をかばい、叫んだ。

「ドサツ

その後、男は倒れた。

倒れた男の前に龍河が立っていた。

疾風の如く走りぬけ、男の首を峰打ちしたのだ。

周りでは拍手や歓声がわいていた。

「ありがとうございます、助かりました。」

「この間とも言つていたな、何者だ？」

龍河は母親の言葉をさえぎる様に聞いた。

「はっはい、あの秋川組という極道の手下だと思います。」

「極道？」

「はい、よくこの街でいろんな人達にたかてるんですよ。博打などのお金を使いきった時など……」

「ぐだらぬ、今後気をつけるのだぞ。」

「はいっ、ほら、あんたもお侍様にお礼を言いな。」

母親が囁くように子供に言い聞かせると

「あつありがとう、お侍さん。」

顔を赤く染めながら言った。

龍河はそれを聞き街の出口へと向かった。

その様子を一人の女が影で見ていた…

## 第一幕

街を抜けるとそこには森があった。

街の出口にも立て看板があつたが、この森を抜けないと次の街に行けないらしい。

聞き込みをしたせいか、口はだいぶ傾いていた。

とにかく、龍河は急いだ。

森の中はひどく静かだった。

龍河は完全に日が落ちるまでにここからを出たかった。

野宿するにはなにか危険な気がした。

(…何かいるのか?)

何か気配を感じた、この森で。

龍河は警戒しながら進んだ。

ガサツ、

音がした瞬間、何かかが龍河の上に降ってきた。

複数の刃が襲い掛かってきたのだ。

龍河は刀を抜き、一本の刃で複数の刃を受けた。

龍河はその刃を振り払った。

すると、複数の刃を持つた何かは宙を舞い、着地した。

「あらあ〜、街で見た時はよく顔が見えなかつたけど、こいつやって見ると結構一枚目ね」アタシの好みかも。」

龍河を襲つたのは街で龍河を影で見ていた女だったのだ。  
女は長い薄紅色の髪をしていて、両側で髪を結んでいた。  
まるでくの一の格好をしていた。

女の両手には刀の刃が何枚もついた搔き爪ような武器をつけていた。

「何者だ?」

「誰だつていいじゃない。ちょっとあんたに用があんのつ。」

「俺は貴様に用はない。」

「冷たいなあ〜。すぐ終わるから待つてよ。」

そう言つと、女は低い姿勢で構え、

「あんたのその刀、高く売れそうだから、頂くよ。」

そう言つて女は地を蹴り、物凄い速さで斬りかかってきた。

(追い剥ぎか…。)

龍河は構え直し、再び刃を受けた。

互いの刃が衝突し、火花を散らす。

龍河は女の攻撃を弾き、今度は斬りかかる。

女は龍河の攻撃を受けきれず、派手に吹き飛ばされた。

後ろにあつた大木に背中を打ちつけた。

「痛ッ！」

そう声を漏らした瞬間、女の頬を掠め、弾丸の如く刃が大木を突いた。

「用がないと言つたとはずだ。次はその首を貫くぞ。」

そう言つて、刀を引き抜き、鞘に収めた。

女はその場に崩れ落ちた。

あまりにも一瞬だったからだ。

しかし、女は震える足をおさえ、再び立ち上がった。

「あんた、強いのね。」

「？」

「不意打ちをしたのは謝るわ。でもあんたを襲つたのは本当は追い剥ぎの目的なんかじゃない。」

そして呼吸を整え、言つた。

「頼みがあるの、今の不意打ちはあんたの力量を量るためにだつたの。

「だから何だ。」

「だから何だ。」

はき捨てるように龍河は言つた。

「さつきあんた、街で極道とやりあつたでしょ？」

「それが何だと言つのだ。」

「アタシもその極道の一員だつたの、でも…。」

女の目つきが変わつた。

「潰したいの。秋川組を。」

「何故?」

龍河は少し興味を持った。

「アタシは生まれてから両親がすぐこの世からいなくなつたの…。」「…!?

「仕事なんでもらえなかつたし、生きてく術が無かつたの…でも。」  
女は続けた。

「その組に拾われたの、アタシ女のくせに身体能力良くてさ、そこを見込んでいろんな修行をされたの。」

女は悲しそうな目で言った。

「最初の仕事が、人を殺すことだつたの…それから、盗みとか、他の組との喧嘩とか、いろんなことに使われたわ…」

女はいつの間にか涙を流していた。

「そんな生活嫌だつた…耐えられなかつたの、だから抜け出してきたんだけどさ、追つ手がいるの。あいつはまだアタシを使う気でいるんだ…」

女は涙を拭つて言った。

「お願いだよ！手伝つてくれよーアタシ一人じゃどうにもできない…。」

龍河はただ黙つて聞いていた。

そして女に背を向け言った。

「好きにしろ。」

女は睡然としていた。

「手伝つて…くれるのかい?」

「名乗れ。」

そして女は、ハツとするような笑みで言った。

「岡山 雛又つて言つんだ。よろしくね。」

「檜山 龍河だ。」

続けて龍河は名乗つた。

すると雛又は恥ずかしそうに言った。

「あの……ココウって呼んでいい? そっちのほうが呼びやすーからさ。」

「…好きにしろ。」

「つして新たに旅が始まった。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0095m/>

---

刺客、ココニアル

2010年10月9日23時32分発行